

浜通りと郡山の学校巡り

筒井哲郎＋佐藤和宏

1. 浜通りの学校をめざす

哲郎が12月4日（月）に国会議員団の福島第一視察に随行することになったので、それを機会に、佐藤和宏と筒井律子が車に同乗して福島の浜通りと中通りを一緒に見学して来ようと、その過程で3人がこもごも感じたことをご報告する。

3日（日）午前9：30に登戸駅前待ち合わせて出発した。川崎インターチェンジから高速道路に入り、都内を抜け常磐自動車道を北上する。天気は快晴で気温も穏やか、日曜日で高速道路もすいているので、茨城県の北に位置する中里サービスエリアで昼食をとることができた。この日は、今年4月に開校したばかりの南相馬市の小高産業技術高校を一目見ようと、常磐自動車道を浪江インターチェンジで降りた。西方向の山間部へ向かう道は通行止めになっており、いったん海岸方面に向かって浪江町で6号線に入り、しばらく北上して南相馬市小高区へ入った。福岡という交差点から西に向かうとJRの踏切を渡り、しばらく住宅地を進むと旧小高商業高校の脇へ出た。車のナビは古いので、新しい高校名では表示が出ず、母体の一つである旧商業高校を目印にしたのである。

廃校になった旧小高商業高校は3階建ての堂々たる校舎で、広い運動場もあった。運動場には10名余りの学生がバスケットボールに興じていた。若い先生らしい人に、新設の産業技術高校の場所を聞くと、南方向の丘を登ったところだと教えてくれた。



図1. 旧小高商業高校

近隣の住宅地に人影がなく、時折車が通りすぎるのみで、住民の姿を見たのは一組の若

い夫婦が買ってきたばかりの大きな荷物を新しい家屋に抱えて入っていくところを見たのみであった。

昨年 11 月の三春町の〈コミュタン福島〉訪問以来、私たちにはずっと気がかりなことがあった。「この国は被曝地帯の子どもたちをいったい何処に導こうとしているのか」という問いである。

今年 7 月、いわき市と広野町で開かれた「廃炉国際フォーラム」には制服姿の高校生が十数人参加していた。彼らは今年四月、南相馬市小高区に開校した〈福島県立小高産業技術高校〉の生徒と思われた。同校の開校は政府が主導する〈福島・国際研究都市（イノベーション・コースト）構想〉の一環であり、文部科学省から県内初の「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール」の指定も受けている¹。

2. 福島県立産業技術高等学校

丘を回り込むように少し上がり、もう一つの校舎、元小高工業高校・新生〈小高産業技術高校〉に着いた。しかし、その名称から受ける颯爽としたイメージとはほど遠く、廃校とあまり変わらぬ佇まい。目立つのは工事ネットに覆われたプレハブ校舎やあちこちに組まれたビティ足場で、まだ改修工事真っ最中といった有り様だ。新聞やテレビ報道の盛り上げとは裏腹な急拵え暫定対応の印象、これではカリキュラムもそれほど画期的なことを行うとは思えない。ちなみに新産業技術高校の校歌は、作曲・長渕 剛、作曲・柳 美里。

小高区の一部を除く避難地域解除は昨年の 7 月 12 日、約 9000 人の住民のうち現在の帰還者は 2000 人に満たないという。汚染状況に大きな改善もみられぬまま基準値を 20 倍に緩めた被曝地帯に、十代の子どもたちを呼び水にして強引に帰還政策を推し進めるとは…。これが復興計画の内実だ。人の気配のない校舎の窓、廊下には什器や備品の入った段ボール箱が積み上げられている。大きなグラウンドとそれを囲む木立、敷地そのものはかなり広い。2020 年の東京オリンピックを前に、為政者たちの前のめりぶりが露わな〈産業技術高校〉の姿だった。

丘の上へ来ると、手前に広い運動場が広がり、既設の 2 階建て校舎が 3 棟、さらに運動場側に仮設校舎が 1 棟あった。体育館が 2 棟あって、その一つの中からは、盛んに走り回る 10 名余りと思われる学生たちの歓声が聞こえた。

¹ 「平成 29 年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール指定校一覧」文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/04/attach/1384128.htm



図 2. 小高産業技術高校

この学校の開校に先立つ 1 年前に小高高校には産業革新科が開設された。案内書には、「産業革新科には、コンピュータ、ロボット関連及び再生可能エネルギー等の実験装置を整備し、学習環境を充実させて、福島・国際研究産業都市（イノベーション・コースト）構想の実現に必要な人材の育成を行うため、効能の目指す新たな産業集積に対応できる専門性の基礎となる知識や実践的な技術を身に着けた人材を育成します」と書いてある²。

とはいえ、まだ仮設校舎が 1 棟設けられていることと、旧校舎も補修工事中の囲いがあるところを見ると、まだ軌道に乗っているとは思えなかった。

3. 請戸小学校

小高産業技術高校を辞去してから、浪江町の請戸小学校を見に行った。そこは、哲郎が 2014 年 1 月に、共同通信の太田記者・堀カメラマンとともに初めて訪れ³、2 度目には 2015 年 11 月に「原発と人権」の 1 行（約 50 名）とともに再訪したところである。請戸の浜は町ひとつがそっくり津波に押し流され、浜辺の漁港にはさぞかし栄えた港であったであろうと想像させる建物が残っているところであった。この浜辺は福島第一から北へ 5 km ほどの距離で、工事用クレーンが遠望できる。

津波の押し寄せた 3 月 11 日の夕方、救助の消防団は迫る夕闇に勝てずいったん引き上げたて翌朝早く出動しようとしたら、厳しい避難指示が出て、うめき声が聞こえたような後ろ暗い気持ちを抱えながら退避を余儀なくしたという悲劇の浜である。

² 「小高工業高校 平成 28 年 4 月、産業革新科がスタート」

http://www.odaka-th.fks.ed.jp/?action=common_download_main&upload_id=1219

³ 「岐路から未来へ（7）プラント技術者」地方紙 26 紙

2014年に訪れたときは、まだ車の残骸や陸に放置された漁船が散乱していたが、今は片付いて広い草原になっている。原っぱの中央にお地蔵さんが建てられて、その前に花やさまざまな飲料水などが備えられていたが、今はその一帯を白い高さ2mほどの塀で囲って汚染土壌の集積場に使っている。被災から六年を経た現在、廃墟は跡形もない更地になっている。瓦礫が片付いた結果、かえって荒涼とした印象が強い。大勢の人びとが生活していた港町の形跡が消滅したということかもしれない。遠い海岸まで遥かに続く更地、請戸小学校の廃墟だけが時を止めて屹立している。海景を遮るように伸びる防波堤の白いライン。その南、はるか向こうに作業用クレーンに囲まれた福島第一原発が垣間見える、その距離約7km。この場所と原発の間を横切って流れる請戸川河口の請戸港は、概ね復旧し漁船も待機していると聞く。しかし、住宅地は根こそぎ整地され跡形もない。防災林や耕作地として整備が進められるというが、すでに人の住めない地区として見捨てられた場所なのだ。

地震・津波・放射能汚染と三重の災害に見舞われた請戸地区。自然災害だけなら時をかけた原状回復も可能だったろう。しかし、放射能に汚された大地、汚された海が町の復興、生活再建の道を閉ざしてしまっている。

海岸に近い請戸小学校は2階もすっぽり津波に襲われて、内部の荒れた様子が見えたが、今は厳重な塀に囲まれて立ち入りができないようになっている。それでも、割れた窓からピアノが陸側の壁に押し付けられたまま傾いて止まっているのが垣間見える。



図3. 請戸小学校の海側（時計塔が3時38分を指して止まっている）

入り口脇の路上に車を置いて、学校の裏手の津波到達時刻を示して止まっている時計塔の様子を見ていたら、「栃木県警察本部」と大書したパトカーがやって来て、若いお巡りさんが車から出てきて「こんにちは」と言いながら、こちらの様子をうかがう目つきをしている。車の中にはほかに二人の警官がとどまっている。会釈をしたら、車をゆっくり

回して帰っていった。それにしても、人気のない日曜の午後の廃墟に、われわれの跡をつけてきたとは、警官も暇を持て余しているらしい。何も言わずに帰っていったのは、毒にも薬にもならない年寄りたちと見くびられたからか？

日も暮れてきたので、6号線をゆっくり走りながら、いわき駅前のホテルへ向かった。

4. よそ者の町へ変貌する富岡町

12月4日、国会議員団と合流して原発の視察に向かうバスに乗り込んだ哲郎といわき駅で別れた律子・佐藤はJR常磐線の富岡行き列車に乗車した。今まで国道六号線沿いからしか見ていなかった被爆地をJRの駅を中心に見て歩こう、とりあえず現在の終点富岡駅まで行き、後は成り行きでということにして。

竜田一富岡間の再開は2017年10月21日、いまだ未開通の富岡一浪江間は2019年度中の再開を目指しているという。9:22発富岡行き、乗り込んだ車内は都内では珍しいボックスタイプの四人掛け、一車両に私たち二人の他わずか二三人、ガラガラでの運行だ。

動き出した列車はいわき市の住宅地を抜け、海岸沿いに走る。車窓を水平線とスキの穂波が過ぎて行く「なんだか銀河鉄道のジョバンニとカンパネラみたいですね」と私(佐藤)、「あら、臺の立ち過ぎだわ」と律子さん。差し向かいでの二人のやりとり。

〈銀河鉄道の夜〉、この世とあの世の境界・冥界を旅する鎮魂の物語は、今回の被曝地巡りとどこか似ていなくもない。

出発して40分ほどで営業開始から一か月半の富岡駅に到着した。以前より100mあまり北に移動したという駅の海側は、線路に沿って長く続く、高さが3m近い白いフェンスに遮られていた。「まあ、あの子たち泥んこで大丈夫なのかしら？」フェンスの大きなポスターを指して律子さんがポツリ。フェンス一面に郷土の四季、行事や生活を写した何種類ものポスターが貼られている。相馬の野馬追い・夜の森の桜並木・夏祭り宵宮・田植え風景、復興が完了したのかと律子さんを錯覚させたそれらの写真は、しかしすべて過去のもの、原発事故によって奪われ、失われた故郷そのものの姿だった。フェンスの向こうには原発ゴミ(放射性廃棄物)の詰まった夥しい量のフレコンバッグが山積みされているというのに。

すべてが真新しい富岡駅前、ロータリで待機する浪江町行きの大型バス。傍らで運転士や車掌が所在なげにおしゃべりしている。私たちが近づくと歓待の趣で説明してくれた。まだ便数が少く浪江から戻るバスは富岡着16時過ぎ(5時間後)だという。乗ろうとしたのが私たち二人だけの空っぽのバス。バスでの乗り継ぎを諦め、常磐線でいわきに引き返しながらか各駅で降りてみようということになった。次の上り便まで1時間あまり、まずは気になった白いフェンスを廻ってみた。フェンス前を砂ぼこりを巻き上げながら作業車が行き交う。歩いてみてそのスケールの大きさに驚かされた。フェンスの一边は500m近い、中には黒いフレコンバッグと廃材、伐採された木材の山があり、大型

の選別施設が建っていた。海岸まで続く海側の更地には、さらに続くバッグの山と大きな建物が見える。小ぶりの煙突(排気筒)を備えていることから焼却減容施設だろうか、地域一帯が原発ゴミの置場、その処理場と化した有り様だ。

フェンスの切れたあたりには野晒しのフレコンバッグの山が幾つも。ほとんどが崩れかけ雑草が生い茂って、水溜まりにはバッグからシミ出た廃液がギラギラと油膜を浮かべていた。「ズサンねえ、大丈夫かしら」律子さんの一言が荒んだ風景に吸い込まれていく。

ゴミの山の間に要塞のようにガッチリしたモダンな建物が立っていた。傍らに[仮設破碎選別施設]の看板、管理棟なのだろうか、その頑丈な造りからとても仮設とは思えないが。門脇のパネル表示は0.156 マイクロシーベルト、信頼のできる数字なのだろうか？ 声はかけてこなかったけれど巡回する乗用車が何度か、ゆっくりと私たちを追い越していった。駅周辺は住宅の建設が進んでいたけれど生活感に乏しく、まるで風合いのない住宅展示場のようだった。

ゴミ置場巡りで意気消沈、足も疲れた二人は「どこかでお茶と昼食を」と新築の低層ホテルを覗いてみた。しかし営業開始はまだ先だと門前払い。プレハブのような造りの簡易ホテル、明らかに出張社員・作業員向けの宿泊用だ。そういえば駅前にも新築アパートが目立つ。高架道路の橋梁も駅の横に出現し、イノベーション・コースト構想は着実に進行しているようだ。富岡町が戻らない避難住民に見切りをつけ、原発ゴミの処理と廃炉事業に町を委ねてしまったこの現実。

駅の近くの新築住宅に洗濯物が出ていた。「住み始めた人もいるのね」律子さんは生活のディテールに目ざとい。家に人の気配などは感じられなかったけれど。家の真向かいの敷地に養生シートが張られ、中で小型ショベルカーが作業している。進む新築工事や整地された周りに比べ「ずいぶん遅れた解体だな」と、近づいてみた。目についたのはシート前に張り出されたいくつもの作業告知板と一時間あたりの線量0.14 ミリシーベルトと表示した掲示板である。作業告知板には多数の会社名が書いてあり、それらの多くに斜線が引いてあって、多くの会社や人員がこの作業に係ってきたことが窺えた。それらを撮っておこうとスマホのシャッターを切りながら近づいて行くと、背後から「危ない！ほら、石綿、アスベストのことでしょ、離れて！」と律子さんの声。確かに〈石綿〉の大きな文字の表示もある。今さら後には引けず、シートの中を覗いてみた。マスクにゴーグルの作業員三人、一人はショベルカーでコンクリートブロックの破碎、二人はフレコンバッグに廃材を詰める作業中だ。すでに十個ほどの大きなバッグが積み上げられ、粉塵が舞い上がっていたが飛散防止の水撒きなどはされていない、「ズサンねえ」律子さんのセリフが蘇る。「放射性物資をまぶしたミクロのガラス繊維なんて頂けない」私も急いでその場から退散した。駅に戻った私たちはコンビニ兼小食堂のキオスクへ。店員に律子さんが沿線の食事処を尋ねる。戻ってきた答えは「いえ、ここだけです」いわき行きの発車間際、かき揚げうどんを掻き込む。粉塵のせい、せき込む

私。ようやくスキスキの列車に飛び乗った。

5. 県立〈ふたば未来学園〉

「とりあえず広野で降りてみましょう」今年七月に廃炉国際シンポジウムで訪れた広野町。動員された町民のもてなし。参加者 500 人の人いきれに忘れそうになっていたが、広野町から原発までの距離は 26.9 km、30 km 圏内のれっきとした被ばく地だった。便数が少ないので、もう一駅回るのは時間的に無理なのではと、広野駅で確認したところ小一時間後に広野始発の便があるという。急いで一回りしてこようと駅を出た。東電の火力発電所や原発と共に歩んできた広野町らしく、駅前には東電関係者とおぼしきビジネスマンが三々五々。しかし、開いているのは小さなパン屋さんのみ。駅から少し離れたとたん人氣が消えた。

駅前から丘の上に見えていたレリーフのような壁画は何だろう。案内板にあったその場所は〈ふたば未来学園〉。そこを目指して坂を上って行くとスーパーマーケット AEON と一体に見える町役場前に出た。「寄ってみますか」と役場の中へ。職員は黙々と机に向かっているが、町中同様町民の姿がない。男性職員の一人がわれわれの方へ歩み寄り、「どんなご用ですか」と声をかけてきた。「ちょっとトイレをお借りしたいのですが」と律子さんの機転。パンフやチラシをかき集め役所を出た。それらはみな居住者・帰還者に向けたもの。2012 年 3 月 31 日の避難解除から 6 年近い広野町だが 30%ほどの町民はまだ戻っていない。そうした未帰還者への配慮は影を潜めていて、広野町の復興計画が帰還ありき・居住ありきの、前のめりのものであることが見てとれる。

坂道の半で体育館にもたれるように設えられた巨大な壁画が姿を現した。その下の前面には岩が配され、水が流れて、さながら山水庭園の趣だ。なんだか取って付けたような映画のセットのような張りぼて感。壁画だけが風景から浮いている。

丘を回り込むように上がって〈ふたば未来学園〉の校舎の前に立つ。福島県初の中高一貫校の触れ込みだが校舎は旧広野中学校のまま⁴。小高の〈産業技術高校〉同様、名前負けするような佇まいである。しかし丘の頂きとあって眺めはいい。ぼんやり周りを見ながら引き返し始めたとたん、校舎から生徒たちがゾロゾロと出てきた。歩行用の隧道でトイメンから来る生徒たちとすれ違った。「こんにちはー」生徒たち一人々挨拶してくる。「こんにちは」「はい、こんにちは」返事を返す私たち二人。私は山道のすれ違いを思い出しながら。時刻は 14 時頃「早い下校時間だね」「シッカリしたあいさつだこと、いい教育してるじゃない」と二人のやりとり。それにしても目立つ制服だ。襟元から裾まで長いストライプ、胸には大きめのエンブレム、チェック柄のズボンとスカート。AKB48 のファッションを手掛ける茅野しのぶ女史のデザインだという。校歌の作詞は谷川俊太郎、講師に小泉進次郎・秋元康・安藤忠雄・林修・西田敏行・為末 大・潮

⁴ 拙著『原発は終わった』緑風出版、2017 年、p.235 に、丘の上の運動場側からの写真を掲載。

田玲子・山崎直子といった内閣[電通]御用達の爽々たるメンバーが顔を揃えている。

2017年11月28日、現校舎西側の造成地で新校舎建設の安全祈願祭、起工式・くわ入れ式が行われた。2019年4月の中学校開校で産声を上げる県内初の中高一貫校「ふたば未来学園」。敷地面積5万7500㎡、多目的ホール棟・体育館・教室棟など全8棟からなり、延べ床面積2万1400㎡。新校舎北側には2.6haのサッカーグラウンド、広野駅東側に三階建て寄宿舍(180人収用)4200㎡という充実の施設群だ。その事業費120億円は国の補助金・復興補助金で賄われるという⁵。

福島第一原発から24km、火力発電所の煙突がシンボルで「エネルギーの故郷」を標榜する広野町は元々東電との繋がりの強い町だ。国際廃炉シンポジウムの会場提供でも明らかのように、原発廃炉事業の基地の町として名乗りを上げている。

昨年初夏に訪れた飯舘村の広大な工事風景が目につく、広野町と遠く離れた飯舘村でも小中一貫校と関連施設の建設工事が進んでいた。交流センター・道の駅などハコもの作り全盛、確かに復興の進捗を示すにはカタチが必要だ。離散した村民を呼び戻す様々な仕掛け、子どもたちをダシにした帰村促進は有効かもしれない。しかし、それらの事業はいかにも数ヶ所に特化している。その上[ふたば未来学園]の工期は一年数ヶ月と大工事としては極めて短い。先にあるのが2020年東京オリンピックだからだ。重点地域をカタチにしてみせ、福島の復興・原発事故からの回復を広く世界にアピールする狙いが透けて見える。地域の選定は極めて恣意的、お国のご意向に奉るものは手厚く、まつろわぬものは蔑ろに。昨年3月で援助が打ち切られた未帰還者への対応同様、復興差別が横行している。広野町も飯舘村も、一步森や山に入れば未だほとんど手付かずの被ばく地帯であることを忘れてはならないと思いを新たにしたい。

すべてが外から内へのベクトルで進められている。教育という事業は、真逆の方向付けをしたエネルギーで進められるものなのに。

6. 火と汐に襲われた・いわき市久ノ浜

三度目のいわき行きの列車に乗る。車中には相変わらず、下校した高校生とビジネスマン・作業員とおぼしき四・五人のみ。「もう一ヶ所くらいは見て回れそう」「何処にしましょうか？」会話しながら車外に目をやる。朝方いわきから列車に乗るまで、いわき市から広野町あたりまでは除染も進み安全になっていると漠然と思い込んでいた。いわき市には復興基地としての活気があり、福島取材の毎回の宿泊地でもある。原発事故からもうすぐ七年、少し旅慣れた気の弛みもあった。しかしフレコンバッグが溢れた富岡を訪ね、人気のない広野を歩いて、放射能との闘いが生半可なものではないのだと改めて思い直した。

実際、車窓を横切っていく広野町ーいわき市間の田園には黒いバッグの小山がホクロ

⁵ 福島民報ニュース 2017/11/29

のようにいくつも点在していた。

海岸線が見えてきた。いつかテレビで見た弁天島の朝日が目に浮かぶ。「そうだ、久ノ浜で降りましょう」。しかし、思い出した映像はもう一つ、2011年3月11日、津波に襲われた震災当日夜半、粉雪の舞う漆黒闇の中で炎上する久ノ浜の姿だった。

震災・津波・原発事故に加え大火にまで襲われた久ノ浜。駅は比較的早く建て直されたようで、住民らしい人も数人……。 「とにかく海へいってみましょう」と閑散とした駅前に出た。通りに面してコンビニが一軒、その向かいにはなぜかスーパーストア規模の大型100円ショップ。人気はあるが賑わいにはほど遠い。海に向かう道、地震・津波に耐えたいらしい民家が数件。しかし人の気配はない。道路を駆け抜けるのはほとんどが作業車輛、すぐに海まで続く広大な造成地に出た。請戸に似た風景だが山側を中心に住宅建設が進んでいる。

造成地の所々に疎らに作りかけの住宅。しかし作業員以外の人は見当たらない。15分あまりで海岸に着いた。海際にミニチュアのように小さな社殿、同じく小振りな鳥居も備わっている。鎮魂と地域の再生を願って建立された旨を記した表示板もたっていた。何もない更地にそれだけがポツリ。鎮守の森・木立を纏わぬ神社は裸体を晒しているようで辛い。しかし被災者や遺族にとっては精一杯の供養なのかもしれない。かなり遠くにもう一つ小さな神社が見える。海岸に沿ってこうしたお社が点々と建っているようだ。

「災害時、久ノ浜の救助で活躍した神社があったって聞いたわ、どこかしら？」

「きっと高台の方でしょう、ここからは見えない」

高さ10mはあろうか、勾配が弛いため威圧感はないがとにかく長大な防波堤だ。堤防手前に「危険テープ」が張り巡らされて、立ち入り禁止になっていた。堤防の側壁は柵で細かく囲まれ一面に杉などの苗木が植えられている。枯れたものも幾つか、吹き付ける海風にもうげに揺れていた。

堤防の彼方にも周りの更地にも人っこ一人いない。「海を見ましょう」大胆な私たち？はテープの隙間から堤防を登り渚に降りた。太平洋の荒波が洗う海岸、砂利と固い砂の海辺は思いの外狭く、私たちは堤防の段差をしばらく歩いた。

いわき側にあるはずの弁天島は岬に遮られて確認できない。反対側には切り立った断崖の小島、それに連なる丘の上に赤い鳥居がみえた。

「あそこ、ちょっと気になるので見てきます。」

「今日は一万歩も歩いた、私は駅に戻って待ってますね。」

そういえば次の列車まで30分を切っている。律子さんと別れ鳥居への道を急いだ。丘の斜面に建つ住宅の間を抜け急な石段を上って目指す鳥居の前に。

鳥居に括り付けられた大きな旗「ここに故郷あり 津守神社」の文字が風にハタめいている。苔むした危なげな石段をさらに登り雑草が背丈ほども生い茂る社殿の前に出た。古民家を思わせる普通の建物、辺りもあまり手入れされていない。中を覗き込んだりしていると、いきなり背後から「どちらからですか？」快活な声。振り向くと作業服の人が二人、

「東京からです。色々見て歩いてます」と返すと恰幅の良い方が近づき話しかけてきた。聞けば東京に事務所・いわきに工場を持つ電装関係の経営者。福島出身の津守神社縁のものだという。相槌を打っていると神社にまつわる蘊蓄を、堰を切ったように喋り出した。「これは面白い、しかし次の列車まで時間がない」

事情を話し名刺交換をして石段を下りると一緒に付いて下りて来た。下に停めてあった車から分厚い本を取り出しさらに話をしようとする。

「必ず連絡します。ゆっくりお話し聞かせてください、工事の話しもぜひ」
早足で駅への道を急いだ。以前から、被災者だけでなく工事を手掛ける側の人たちの話しも聞いてみたかった。あの社長さんも私が話の出来る相手だと直感して語ってくれたのだろう。東京に戻ったら改めて連絡を取り合ってみよう。そんなことを考えながら律子さんの待つ久ノ浜駅へと足を早やめた。

それにしても長い一日だった。疲れ切ったのは足のセイではない。仕事も生産も・近所付き合いも・家族の団欒も何もかも失ってしまった、人間の生活を根こそぎ消してしまった富岡の、底知れない喪失感に打ちのめされたからである

7. 郡山

4日(月)のメインイベントを終えた5日(火)は、夕方5時までに帰宅して、夜7時からの会合に間に合えばよい。常磐自動車道をまっすぐ帰るのは能がないから、この機会に郡山市の文化施設を見て、その地の歴史を知ろうではないか、と一決。朝9時にいわき駅前のホテルを出発、途中いろいろインターネットで検索して、安積歴史博物館へ行くことにした。カーナビのお陰で、開成町3丁目の博物館へ着いたのが10:30頃。この場所のはかつて郡山市の山沿い高原地帯で不毛の地であったのを、明治初期に各地の失業士族を入植させて切り開いた丘陵地帯である。その一角に、旧福島県尋常中学校本館があり、その立派な木造校舎が、現在の安積歴史博物館として開放されている。教室は1階におよそ10室、2階にも10室くらいで、こぢんまりしているが、格調高い風格を漂わせている重要文化財である。2回にバルコニーを乗せた玄関を入ると右脇が事務室になっていて現在は受付の人が一人座っている。正面突き当りに応接室、その左に校長室で、校長先生が玄関のすぐそばににいるというのは面白い。1階右側は理科室など特殊な教室、左半分と2階が机と椅子が繋がった生徒の席を並べた昔懐かしい教室である。2階の左奥には全校生徒が集合できるようなシャンデリアが下がった大講堂がある。

1階の教室には、この地域の開拓の歴史が紹介されていた。安積疎水を作って開墾を進めたこと、それでも挫折してこの地を離れた開拓者が少なくなかったこと、開拓者は福島県内の旧士族ばかりでなく、九州から来た人までいたことなど。

圧巻は2階中央の4教室を使ったこの学校の卒業生の紹介である。中でも朝河貫一博士の事績は初めて知って目を見開かされた。朝河博士は明治にアメリカへわたって法制史の教授としてイエール大学やダートマス大学で教鞭をとり、ポーツマス条約に際して

日本の使節団を助け、第2次大戦に向かう時期には、日本の軍国主義を憂え、他方ヒトラーがいずれは自殺に至るであろうことを早い時点で予想していた、と紹介している。また、「二つの祖国への遺言」という言葉が紹介されていた。

二つの祖国への遺言

米国よ、

国際連合が発足したとき、派遣を行使してはならない。

戦後、米国は謙虚さという

学科を学ぶことによって、世界に現存する矛盾と不平等に思いを致し、

そこから真の正義を考えなければならない。

日本よ、

敗戦後、日本は民主改革によって、再び大発展をとげるであろうが、

軍部や権力者の指導に盲従して戦争に走った共同体的倫理は、もはや捨て去ろう。

民主主義においては、政体がそうになっているだけでは民主国家とはいえない。

国民一人一人は常に道徳と責任を自覚するとともに、

民主主義を勝手にゆがめる勢力に対しても、これに打ち勝たなければならない。

こうしてこそ平和と真の民主主義が訪れるのである。

そのほかの著名な卒業生として、久米正雄・中山義秀・湯浅譲二などが目を引いた。2階の窓から、隣にある現在の高校の校舎が見えたが、いかにも安普請と感じられた。

今回の旅行では、明らかに人の世の幸せを壊す原発を巡る問題が頭を占領していたが、帰り際に歴史上のすぐれた先達の歴史に接することができて、一服の清涼剤を与えられた思いがする。